

安田女子大学紀要 48, 1-10 2020.

日下部鳴鶴と杉聴雨の漢詩の応酬 —東宮・嘉仁親王の彦根城行啓を讃えて—

内 田 誠 一

The Exchange of Classical Chinese Poetry Between Kusakabe Meikaku
and Sugi Chōu : Composing Poems in Praise of Crown Prince Yoshihito's
Visit to Hikone Castle

Seiichi UCHIDA

書道学科, 文学部,
安田女子大学

要 旨

明治大正期の官僚であった杉聴雨が、明治三筆の一人である書法家の日下部鳴鶴に宛てた毛筆書簡幅がある。この書簡の末尾には、鳴鶴から贈られた詩に次韻した詩が認められている。この次韻詩の原詩をつきとめ、原詩と次韻詩の内容を分析し、詩が詠じられた背景をさぐった。その結果、この二首の詩は、東宮である嘉仁親王（のちの大正天皇）が彦根城に行啓されたことを讃えた内容であることが判明した。原詩では親王が城山の迎春館に立ち寄られたこと、次韻詩では「迎春好乞親王筆、扁額高懸霽墨光」（親王よりご染筆を賜って扁額を懸けたら素晴らしいだろう）という句が、それぞれ詠み込まれている。この句は、当日親王が迎春館から琵琶湖を見下ろして五言古詩「望湖」を詠ぜられた事実を踏まえて作られたものと考えられよう。しかし、残念ながら、親王の御染筆を賜するという願いは実現しなかったようである。

キーワード：大正天皇、日下部鳴鶴、杉聴雨、漢詩、迎春館

一、序

明治大正期の官僚であり漢詩人・書法家でもあった杉聴雨が、明治三筆の一人である職業書法家の日下部鳴鶴に宛てた毛筆書簡幅（京都・個人蔵）がある¹⁾。その文面から、次のような両者間の事情が推測される。以前に来訪した鳴鶴に対して、聴雨が近江の永源寺に観楓に出かけることを話した際、鳴鶴が同行を望んだようであるが、聴雨は断っていた。ところが、鳴鶴からやはり同行したいという書簡を受け取ったと考えられ、聴雨はあくまで同行を断る意思をはっきり伝えるために、この書簡を送ったのであった。

ところで、この書簡の末尾には、鳴鶴から贈られた詩に聴雨が次韻した七言絶句が認められている。ふたりの文人の文墨を介した交流の一端を示す遺品として貴重である。本稿ではこの次韻

詩の原詩（鳴鶴の詩）をつきとめ、原詩と次韻詩の二首の内容を分析し、さらに、この書簡を含む幾つかの資料を用いて、詩が詠じられた背景を些か探してみたい。

なお、敬称・敬語については、史家の仕法に倣い、最小限度にとどめるよう努めた。

二、杉聴雨が日下部鳴鶴に宛てた毛筆書簡について

まず初めに、毛筆書簡の差出人である杉聴雨と宛先の日下部鳴鶴、この二人の人物について確認しておきたい。

杉聴雨（1835～1920）、名は重華、通称孫七郎、聴雨はその号。別号に古鐘・吞鵬・古硯斎など。周防国吉敷郡の人。長州藩士で、幕府の遣欧使節に随行して欧米諸国を視察。維新後は、山口藩権大参事・宮内大輔・特命全権公使・皇太后宮大夫、枢密顧問官を歴任、子爵に叙せられた。漢詩人・書法家としても名高い。印癖があり多数の自用印を所有していた（図1の印譜参照）。また、東宮御用掛として嘉仁親王（のちの大正天皇）に習字を進講。小松茂美博士は、「大正天皇は、おそらくこの杉聴雨の書法の影響を受けられたのではなかったか」（『天皇の書』、文芸春秋、2006年）と推測している。

日下部鳴鶴（1838～1922）、名は東作、字は子陽。初め東嶼・翠雨と号したが、のち鳴鶴と改めた。彦根藩士・田中総右衛門の次男。成人後、日下部氏を嗣ぐ。巻菱湖や貫名崧翁の書風を学んだ。維新後、大久保利通の知遇を得て太政官書記官となったが、大久保横死後は官を辞して職業書法家として生活。1880（明治13）年、中国より楊守敬（1839～1915）が駐日公使の随員として来日した際、楊の下で中国の金石学や書学を学んだ。のちに中国へ渡航し、龔越や呉昌碩ら著名文人たちと交流した。明治三筆の一人と仰がれた鳴鶴には門人が多く、丹羽海鶴・近藤雪竹・比田井天来などはその高弟である。

では、杉聴雨の書簡（図2）の分析に入りたい。まず、文面を翻刻する。斜線（／）は改行を表し、句読点は内田が補った（以下同様）。

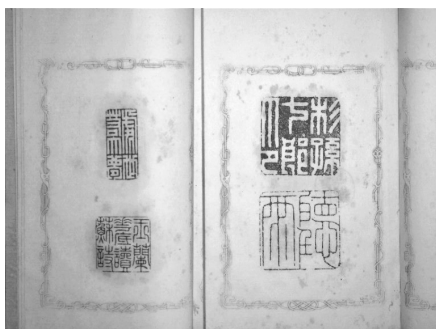


図1 原鈴本『杉聴雨印譜』より、聴雨自用印の例として4顆の印影を挙げた。右から、姓名印「杉孫七郎印」（白文）、雅号印「聴雨」（朱文）、冠冒印「処世若大夢」（李白「春日醉記言志」の一句）（白文）、遊印「玉蘭華底読蘇詩」（朱文）。

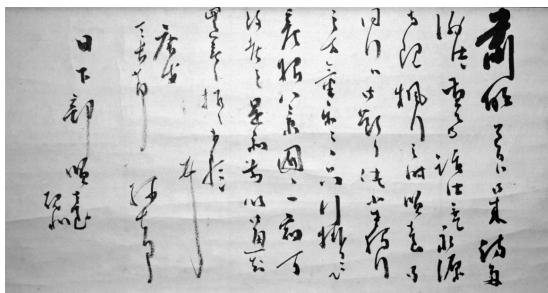


図2 杉聴雨筆毛筆書簡（文面部分）。

肅啓 過日ハ御來訪多／謝仕候。兼て御話仕置候永源／寺觀楓行之時、賢台御／同行ハ御断り仕候。小生独行／之方、氣樂ニ候。只行掛リニて／彦根八景園ヘ一宿可／致考ニ候。是亦前以御通知／置無之様ニ御頼候／頓首／庚戌／天長節 孫七郎／日下部賢台／硯北

書簡第2～第3行に「永源寺觀楓行」とあるが、永源寺は臨済宗永源寺派の大本山。開山は、元（中国）に渡り中峰明本の下に参禅した寂室元光（1290～1367）。江戸前期には、公家出身の僧で御水尾院の帰依を受けた一絲文守（1608～1646）が住持となって再興された。同寺は夙に紅葉の名所として名高く、10月下旬から11月にかけて「觀楓」の騷客が雲集する。書簡第11行に「庚戌天長節」とあるので、1910（明治43）年の11月3日に認められたものと知れる。聴雨はこの書簡を投函してまもなく觀楓行に出立したと思しい。

書簡第6行に「八景園」とあるが、正しくは「八景亭」。この庭園は唐の玄宗皇帝の離宮をイメージして造営されたことから玄宮園とも呼ばれるので、「亭」を「園」に誤ったものと推測される。八景亭は1677（延宝5）年、彦根藩主の井伊直興によって整備造営され、1679（延宝7）年に完成し²⁾た大池泉廻遊式大名庭園。中国の瀟湘八景をとり入れたとも、また近江八景をとり入れたとも言われる。井伊家が維新後に八景亭を民間に売却したが、1886（明治19）年に買い戻し、後に料理旅館として民間に貸し付けたとされる³⁾。そのため、本来は庭園全体を表す「八景亭」の名が、恰も料理旅館の屋号として世に浸透していったようだ。書簡第六行に「八景園ヘ一宿」とあるので、明治の末年には、料理旅館としてその存在が喧伝されていたようである。

八景亭で最も眺めのよい部屋は、13帖の臨池閣（図3）。池に迫り出すように造られており、池が一望できるので浮見堂とも呼ばれる。『彦根案内』（彦根産業同志会、1917年）の八景亭の項には、「臨池閣月夜の景趣は真に一幅の図画の如し」とある。聴雨は臨池閣に宿泊したのであろうか。

さて、書簡の内容を現代語にすると次のようになろう。

肅啓 過日は御來訪いただき有難うございました。かねてよりお話しておりました永源寺觀楓行の時のことですが、賢台のご同行はお断り致したいと存じます。小生は独りで行く方が氣樂です。ただゆきがけに八景亭に一泊しようと考えております。これまた（八景亭には）前もって私が泊まることを通知されぬよう、お願い致します。 頓首

鳴鶴が聴雨の觀楓行に強く同行を希望したのは、彦根出身の鳴鶴が地元・永源寺とその周辺を案内したいと考えていたからであろう。一方、聴雨は、「独りで行くほうが氣樂」、「前もって私が宿泊することを八景亭に知らせないでくれ」という。つまり、聴雨は忍び歩きの旅を望んだと思われる。もし鳴鶴と同行すれば、鳴鶴の知人友人たちは、必ずや聴雨を見て何処のお方



図3 絵葉書「(彦根八景亭) 浮見堂」(大正～昭和初期ごろ)。臨池閣内部から池の方角を撮影したもの。内部の様子も聴雨の時代とさほど変わっていないと思われる。

かと訊ねるに違いない。高官で文人でもある杉聴雨と聞けば、酒席を設けて揮毫を依頼しようとする者も出てくるかもしれない。また、鳴鶴が八景亭に対して事前に高官聴雨の来臨を告げたならば、それこそ関係者こぞって大歓迎の大騒ぎとなり、ゆっくり観楓どころではなくなってしまうであろう。聴雨はかねてより、自身の地位や名声に惹かれて寄ってくる俗人たちに辟易することが多かったのではないか。

ところで、書簡の末尾（図4）には、次のような次韻詩が認められている。

雲霽蒼空鶴影／揚、湖山百里似連牆／迎春好乞親王筆、／扁額高懸麝【香】⁴⁾ 墨／光。次／迎春館瑤韻乞／正

この詩は聴雨が鳴鶴の詩に次韻したもので、韻字は下平声七陽韻（揚、牆、光）。訓読すると次のようになる。但し、次韻詩本文に続く詩題、および雅正を乞う文の訓読では、抬頭は省略した。

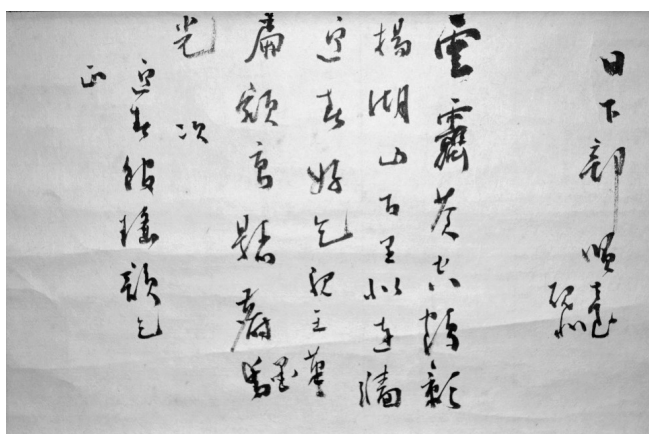


図4 杉聴雨筆毛筆書簡（次韻詩部分）。

雲霽蒼空鶴影揚	くもは 蒼空に鶴影揚がり
湖山百里似連牆	こざんひゃくり 連牆に似たり
迎春好乞親王筆	げいしゅん しんのう ふで こ よ 迎春 親王の筆を乞うに好し
扁額高懸麝墨光	へんがく たか か じゃぼくひか 扁額 高く懸くれば 麝墨光らん
次迎春館瑤韻。乞正。	げいしゅんかん よういん じ ただ 次迎春館瑤韻に次す。正されんことを乞う。

この詩を読むと、今一つ詩意がはっきりしない。「親王」とは何方なのか、「迎春館」の扁額をなぜ親王に依頼しようとするのか疑問である。やはり、鳴鶴の原詩を見る必要がある。

三、日下部鳴鶴の原詩と杉聴雨の次韻詩

鳴鶴の原詩とはいかなるものか。聴雨の書簡に「次迎春館瑤韻」とあるので、鳴鶴が彦根城の迎春館に関する詩を詠じ、聴雨がその詩の韻字をその順序のまま用いて和した詩（次韻詩）が、前節の最後に掲げた詩ということになろう。今回、『真跡鳴鶴遺稿全集9 鳴鶴詩稿集』（財団法人 日本書道教育学会、1971年）の中に、「東宮殿下行啓於彦根城恭賦一詩以紀盛事」と題された詩が収載されていることを確認できた。両者の詩はいずれも七言絶句という形式を用いて彦根城

の迎春館を詠じ、「揚、牆、光」の順に押韻している。よって、杉が次韻した鳴鶴の原詩は、この詩に他ならないと言えよう。また原詩の題から、聴雨の次韻詩の転句にある「親王」が、東宮の嘉仁親王であると知れる。

東宮殿下行啓於彦根城恭賦一詩以紀盛事
 (東宮殿下 彦根城に行啓せらる 恭しく一詩を賦して以て盛事を紀す)
 縹渺雲霞瑞色揚 縹渺たる雲霞 瑞色揚がり
 仰瞻鶴駕駐城牆 仰ぎ瞻る 鶴駕の城牆に駐まるを
 迎春館上感何限 迎春館上 感 何ぞ限りあらん
 偉麗湖山添寵光 偉麗の湖山 寵光を添う

詩題中の「東宮殿下」は、前述の通り、当時皇太子であった嘉仁親王。「行啓於彦根城」は、1910（明治43）年10月8日の彦根城行啓を言う。第一句の「縹渺」は遠くかすかなさま。「瑞色」はめでたいさま。第二句の「鶴駕」は東宮の乗られる車。「城牆」は本来、城（まち）の周囲にめぐらした厚い壁を意味するが、ここでは彦根城の堀を言う。第三句の「迎春館」は、東宮を迎えるために城山に建造された建物（図5）。東宮の彦根行啓に先立ち、旧大名の井伊伯爵家が行在所を建設すべく、前月の9月より建設に着工し、ひと月弱という短期間で竣成させた⁵⁾。「寵光」は光臨（ここでは東宮の行啓）の意ともとれるが、もっと抽象的な意で「（東宮の）恩徳の光」ととるのが穏当であろうか。



図5 絵葉書「近江彦根城跡 今上天皇御便殿（迎春館）」（大正時代）。画像右の方が西側で、画像右上あたりに琵琶湖を隔てた対岸が少し見える。

東宮殿下が彦根城に行啓遊ばされた。恭しく詩一首を作り、この偉大な事柄を書き記した遠く微かに見える雲や霞には目出度い様子がただよい、東宮殿下のお乗り遊ばされた御車が彦根城の堀に御駐輦になるのを奉迎した人々は仰ぎ見ることができた。殿下が城山の迎春館に歩をとどめられて、誰もが感激すること限り無く、琵琶湖を見渡せる勝れて麗しいこの城山に、長くも恩徳の光が加わったことであった。

では再度、聴雨の次韻詩を掲げたくえて、内容の分析を試みたい。

次迎春館瑤韻（迎春館の瑤韻に次す）
 雲霽蒼空鶴影揚 雲霽れて 蒼空に鶴影揚がり
 湖山百里似連牆 湖山百里 連牆に似たり
 迎春好乞親王筆 迎春 親王の筆を乞うに好し
 扁額高懸麝墨光 扁額 高く懸くれば 麝墨光らん

第二句の「連牆」は連なった障壁。第三句の「親王筆」は嘉仁親王の筆蹟。第四句の「扁額」は横額。「麝墨」は香りのよい墨。ここでは、親王の香り高い墨蹟を言う。

雲がはれて鶴の姿が蒼い空へと昇って行き、湖の向こうの遠くの山々は、横に連なる障壁のように見える。城山の迎春館には、東宮殿下に御染筆を乞うて掲げるのがよいだろう。その扁額を高く懸けたならば、香氣あふれる墨蹟が眩いばかりに光り輝くにちがいない。

聴雨は、起句で鳴鶴の詩の「瑞色揚」を承けて「鶴影揚」とし、転・結句では「感」「寵光」を承けて「筆」「麝墨光」としている。鳴鶴が抽象的な事象を詠じているのに対して、聴雨はより具体的な事物を詠じているのが印象的である。

ここで、親王行啓（10月8日）から11月初旬の観楓行までの両者の動静について考えてみたい。まず、親王行啓の当日であるが、聴雨は彦根に向向いてはいないと思われる。『大正天皇実録 補訂版 第三』（ゆまに書房、二〇一八年）（以下『実録』）の明治四十三年九月二十四日から十月十一日までの京滋への行啓記録には、杉孫七郎の名は見えないからである。鳴鶴はどうか。「東宮殿下行啓於彦根城恭賦一詩以紀盛事」詩を詠じたことから、郷里にもどっていた鳴鶴が行啓を奉迎した可能性が考えられる。もし、正式な奉迎者の一員であったならば、彦根出身の当代随一の書家であったので御前揮毫などをしたことであろう。もしそれが実現したならば、井伊直忠にとっても面目躍如たる演出となっただろうし、その事実は後世まで語り継がれていたにちがいない。しかし、中西慶爾『日下部鳴鶴伝』（木耳社、一九八四年）の年表では、「四十三年辛亥、四月、東京発、福井を経て、山中温泉入湯。福井・彦根・大垣を過ぎて六月帰京」とある。十月に彦根に赴いた記録はない。よって、「東宮殿下行啓於彦根城恭賦一詩以紀盛事」の七絶は、新聞報道や郷里の友人たちからの情報を得て創作されたことになろう。

ところで、『実録』の明治四十三年十月三十一日の条には、「午後一時三十分御出門、上野公園内日本美術協会列品館に開ける同協会第四十五回美術展覧会に行啓、会頭伯爵土方久元・子爵杉孫七郎・同金子堅太郎等に謁を賜ひ、列品並びに席画を御覧あり…」とある。この記述から、聴雨は少なくとも10月末には東京に居たということになる。11月3日の日付のある聴雨書簡において、「過日ハ御来訪多謝仕候」とある中の「過日」とは10月下旬ごろと考えてよいのではないかとすれば、両名はその時分に東京鳥居坂の杉邸で会談したと考えられよう。鳴鶴の聴雨邸訪問は、親王行啓の様子を聴雨に報告するためだったのかもしれない。そして、その折に彦根への来訪を勧めていたのではないかと。聴雨が「永源寺の観楓に出かけたい」と言ったので、「私も同行させてほしい」となったのかもしれない。それを聴雨は断った。数日経って鳴鶴は「やはり同行させてほしい」との書簡を送ってきた。そこで聴雨は「兼て御話仕置候永源寺観楓行之時、賢台御同行ハ御断り仕候」と断りの書簡を送った、と考えると辻褄が合うのではないかと。

四、東宮御詩の五言古詩「望湖」―聴雨の「迎春好乞親王筆」という詩句の背景―

前節において、「鳴鶴が抽象的な事象を詠じているのに対して、聴雨はより具体的な事物を詠じている」と指摘した。それは、両者の立場の違いに起因していると考えられよう。鳴鶴にとって殿下は雲の上の存在であり、行啓の様子を後から知って畏れ多いことと感じ、あのような詠み

ぶりとなったのであろう。一方、聴雨は鳴鶴よりも理性的に東宮行啓を詠じる立場に在ったと言えよう。東宮御用掛として嘉仁親王に近しく仕えたことがあり、次韻した時には、数々の官職を歴任して枢密顧問官にまで至っていた。鳴鶴は明治三筆の一人とはいえ、子爵に列せられた聴雨とは世俗の立場や階層を全く異にしていたわけである。両者の読みぶりに違いがあるのは当然のことであろう。

聴雨の「迎春好乞親王筆、扁額高懸麝墨光」の句に見える、東宮殿下にご染筆をお願いし、裝潢を加えて扁額に仕立てて迎春館に掲げたらいいのでは、という発想は、高位高官であった聴雨ならではのものではあろう。さらに突き詰めてみると、この発想は次の事実から触発されて生まれた可能性が考えられるのではないか。それは彦根山北麓にある井伊家の下屋敷「楽々園」には、谷鉄心（1822～1905・彦根藩士、維新後は左院一等議官、詩書を善くした）の筆になる「楽々十景」の詩の扁額が懸っていたという事実である。この話を鳴鶴から聞いて聴雨が知っていたと仮定すると、山の麓にある谷鉄心の扁額に触発されて、山の上にある迎春館には、当然高貴な方の扁額を懸けたらよいと考え、漢詩や書法の名手であった東宮の染筆をお願いできれば、という考えが浮かんではなかろうか。のちに、歴代天皇随一の漢詩の名手とも謳われる嘉仁親王である。加えて、四言、五言の一句のみではなく、親王御自身が彦根城行啓の際の印象を、漢詩に詠ぜられたものを染筆していただきたいという希望もあったのではないか。

この推測は、筆者の妄想なりと一笑に付されるかもしれない。しかし、嘉仁親王は、この1910（明治43）年10月の滋賀行啓の際に、漢詩二首をお作りになっている。そのうちの一首、「青山登高の処」で詠い起される五言古詩「望湖」は、必ずや城山の迎春館から琵琶湖を眺められた際の御作ではないかと筆者は推定していた。迎春館は城の西の丸に建てられており、その西には琵琶湖があるからである。試みに『実録』を繙いてみると、果たして、彦根城に行啓された時の模様に関して、「彦根城址に行啓、徒歩城山に御登臨あり、近くは佐和山の城址より遠くは湖北の連山を御展望」（傍点内田）という記述があったのだった⁶⁾。親王「御展望」の後に詠ぜられたその詩。

望湖（湖を望む）	
青山登高処	青山 登高の処
天晴俯太湖	天晴れて 太湖を俯す
煙波何縹渺	煙波 何ぞ縹渺たる
帆影白模糊	帆影 白くして模糊たり
清風来吹袂	清風 来りて袂に吹き
且喜塵埃無	且つ喜ぶ 塵埃の無きを
徘徊不忍去	徘徊して去るに忍びず
此地真名区	此の地 真に名区なり

現代語に訳す必要が殆どないほど、平易明快、純粹無垢な御作と言える。第一句に「登高」の語を用いているのは、親王が城山に登られた日が10月8日で、旧暦に直すと9月6日、重陽節の三日前であるからであろう。重陽節は旧暦の9月9日に頭に茱萸の実を挿して小高い丘や山に登り（登高）、菊酒を飲んで無病息災を祈る古代中国の行事。この詩では特に後半四句に親王の率直な感懐が表現されているように思われる。「清風」が吹き「塵埃」が無く、あちこち歩きまわ

って立ち去りがたいこの彦根の城山の地は、まことにすばらしい景勝の地である、と大絶賛されている。井伊直忠は後にこの漢詩を知ることとなったであろうが、さぞかし感激したであろうことは疑いない。

親王が城山迎春館から琵琶湖を眺められてこのような御詩をお作りになったという話が、鳴鶴から聴雨に伝えられていた可能性が高いであろう。

そうであればなおさら、この「望湖」詩を御染筆いただき扁額に仕立てて迎春館の御座所(図6)に奉掲したらよいのではないかと聴雨が考えたに違いない。

しかし、残念ながら東宮の染筆下賜の願いは、結局実現しなかったようである。聴雨は東宮に願い出る機会を得られなかったのかもしれない。あるいは、次韻詩後半の二句は、聴雨の単なる夢想に過ぎなかったのであろうか。

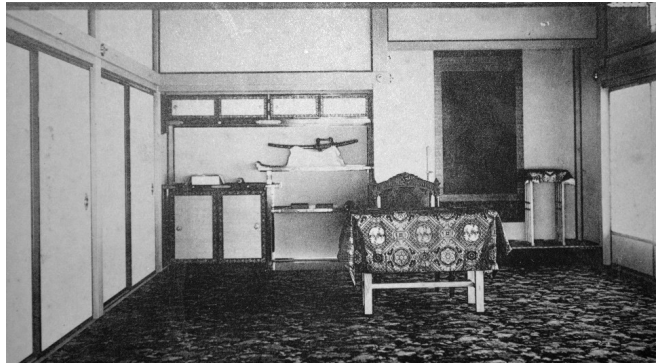


図6 絵葉書「近江彦根城山迎春館内 今上天皇御座所」(大正時代)。即ち、明治43年の東宮行啓の折の御座所である。

五、結 語

杉聴雨の日下部鳴鶴宛毛筆書簡の末尾に付された聴雨の次韻詩を本論執筆の起点として、まずその原詩をつきとめ、そして両者の詩の内容を分析・比較し、さらに詩の背景にある東宮の彦根城行啓および東宮御作の五言古詩「望湖」の存在とあわせて考察してみた。

世俗的立場や階層は異なるものの、明治を代表する文人官僚と職業書法家との詩文を介した文雅な交流は寔に好ましく、そして麗しく感ぜられる。次韻詩が添えられた聴雨の書簡と今に残る鳴鶴の原詩。それは、漢詩・漢文が知識人の交流の普遍的なツールであった明治時代における、二人の文人の文化的・文学的な所為とその高雅な薫香を今に伝える遺品と言えよう。

注

1. この書は「京都・崇叡堂文庫展—日本の宮廷と漢詩文」(観峰館・2017年開催)に出陳され、同展図録の45頁に掲載されている。同展は、102年ぶりに一般公開された「光格天皇宸翰尺牘」(福井崇蘭館旧蔵)で話題を呼び、読売・毎日・京都・報知の計4紙で大きく報道された。同展図録には、元号選定委員の一人である石川忠久博士の序文が掲げられている。
2. 竣工時期に関しては異説もある。宮田思洋(常蔵)『彦根史話』(彦根史話刊行会、1956年)の中の「二三 廻遊式庭園の粋八景亭主」と題された文章では「槻御庭に一年おくれて延宝八年(1670)に竣工したのが槻御庭である」としている。槻御庭(楽々園)と槻御庭(八景亭)のそれぞれの完成時期に一年の差があったという説である。ただ、この説の論拠となる資料名については、言及されていない。
3. 朝日新聞デジタル(2017年10月3日、彦根支局大野宏記者執筆)。
4. 書簡では、「麝」の字の下「香」の字に圈点が付けられて、その右に「墨」の字が書かれている。即ち「麝墨」が正しい。「麝墨」は、第三節で述べているが、香のよい墨のこと。原義は「麝香(雄の

麝香鹿から採る高価な動物性香料)」のような素晴らしい香を放つ墨。聴雨は「麝墨」の「麝」の字を書いた際に、脳裡では「麝香」をイメージしていたため、思わず誤って次の文字を「香」と書いたのであろう。

5. 井上円了『井上円了選集第14巻』（井上円了記念学術センター、1998年）に収載される『南船北馬集』の「滋賀県巡講第一回（湖東）日誌」に次のようにある。

城頭の迎春館は皇太子殿下を迎へ奉らんとて天下の良材を集め、僅に一ヶ月間にて造成したりと雖も、清美を尽くしたる新館なり、其建築費十六万円、井伊家より支出す、因て人皆殿様工事と称す、望中の所吟一首あり、

湖上看疑対画屏、四山雪満水逾青、迎春館外更相望、天地風光自作庭

また、『彦根案内』（彦根産業同志会、1917年）の「迎春館」の項には、次のように解説されている。

城山の西の丸にあり、東宮殿下の行在所に宛つるため明治四十三年九月工を起し貳拾万円の工費と数百人の名匠を以て僅か二十六日間に竣成せしめたるものにして手中宮内省技手の設計に係り其用材建築法地方に其比を見ず、四十三年及び四十五年の兩度行啓を迎へ奉り…

6. 『大正天皇実録 補訂版第三』（ゆまに書房、2018年）の211ページに次のようにある。

八日は午前八時二十五分御出門、…（中略）…長浜停車場にて汽車に御搭乗、十一字五十二分彦根停車場に著かせられ、直ちに彦根城址に行啓、徒歩城山に御登臨あり、近くは佐和山の城址より遠くは湖北の連山を御展望、伯爵井伊直忠・海軍中将男爵三須宗太郎以下諸員に謁を賜ひ、便殿に陳列の武具・古文書等を御覧の後、観音台址・鐘丸址等を御一巡あり。

なお、もう一首「琵琶湖」と題された七言絶句を作られているが、この詩は同じく明治43年の滋賀行啓の折の御作であるが、唐崎での御詠とされている。

鳴 謝

杉聴雨毛筆書簡の翻刻に関しては、塩村耕先生の指正をかたじけなくした。ここに厚く御礼申し上げます。

〔2019. 9. 26 受理〕

コントリビューター：富永 一登 教授（日本文学科）

